ダルモーッタラの「目的実現」理解

繆　寿楽

問題の所在

ダルマキールティ（Dharmakīrti 法称 ca. 600–660 CE）は『釈量論』（*Pramāṇavārttika*）で「目的実現能力」（arthakriyāsāmrthya）の有無に基づき、認識対象には二種類あることを宣明している。独自相はその「目的実現能力」を持ち、共通相は「目的実現能力」を持たない[1]。そのような能力は「目的実現」に対する能力である。この「目的実現」をダルマキールティがどのように理解しているかについては数々の研究がなされてきているものの[2]、彼の作品『正理一滴論』（*Nyāyabindu*）を注釈していることから彼の後継者とも言われるダルモーッタラ（Dharmottara 法上 ca. 750–810 CE）が「目的実現」をどのように理解しているかは不明瞭である。本稿の目的は、ダルモーッタラ注『正理一滴論注』（*Nyāyabinduṭīkā*）における彼の論述を手がかりに、先行研究では見逃されてきた「目的実現」及びそれと関連する「目的実現能力」に対するダルモーッタラの理解を解明することである。それにより、仏教論理学の流れのなかで、「目的実現」理解の歴史的展開を探りたい。

1　ダルマキールティの「目的実現」理解

まず以下に、諸先行研究を踏まえて、これまでの「目的実現」と「目的実現能力」に対する理解をまとめる。

1.1　「目的実現」の意味

桂 1983: 98 によれば、ダルマキールティの著作中では、arthakriyā には次の二義がある。

1. 認識論的には、arthakriyā は「人間の目的の成就」を意味する。例えば、実在する火は煮たり焼いたりする能力を持っており、その意味でその火は認識者の期待を満足しうるのである。これがダルマキールティにとって第一義的意味である。
2. 存在論的には、arthakriyā は「因果効力」を意味し、「結果を生み出すこと」と理解すべきである。この種の arthakriyā は実在（vastu）の定義中によく言及されている。実在と非実在とはこの「因果効力」の有無によって決定される。これが第二義的意味である。それは、例えば、色などが色などの視覚知を生じさせることである。

1.2　三種類の「目的実現能力」

arthakriyā を「人間の目的の成就」と理解するにせよ、「因果効力」と理解するにせよ、その「目的実現」に対する能力（artharkiyāsāmarthya）として、三種のものを挙げることが可能である。稲

[1]PV 3.1: mānaṃ dvividhaṃ viṣayadvaividhyāc chaktyaśaktitaḥ arthakriyāyāṃ . . . ‖（「〔認識〕手段には二種類ある。〔認識〕対象が二種類であるから。というのは「目的実現に対する能力」があるか、ないかに基づく。（以降省略）」）

PV 3.3: arthakriyāsamarthaṃ yat tad atra paramārthasat | anyat saṃvr̥tisat proktaṃ te svasāmānyalakṣaṇe ‖（「目的実現能力のあるものが、ここで勝義有（paramārthasat）である。別のものが世俗有（saṃvr̥tisat）と説かれている。その両者が独自〔相〕と一般相である」）

[2]桂 1983、沖 1982、稲見 2012、Nagatomi 1967–68、Mikogami 1979 などを見よ。

見 2012: 56–57 の記述をまとめると以下のようになる。

1. 火であれば、それが持つものを煮たり、焼いたりする能力のこと、壺であれば、それが持つ水を保持する能力のことである。
2. ダルマキールティによれば、知覚は独自相から直接生じる。それゆえ、第二の「能力」として、独自相が持つ知覚を生ぜしめる能力が理解される。
3. 存在はすべて瞬間的な存在（刹那）であり、次々と自己に類似した次の瞬間的存在を生み出しているというダルマキールティの理解から、第三の「能力」として、瞬間的な存在がもつ自己に類似した次の瞬間的存在を生ぜしめる能力が見出される。

上述した三種のうち、第一と第二の能力は、それぞれ桂 1983 が言う認識論的な arthakriyā と存在論的な arthakriyā に対応している。第三の能力について、それは、人間の期待を満足するという認識論的な arthakriyā の説明と合わず、刹那滅と関わっているため、存在論的な arthakriyā に対応していると考えられる。

2 ダルモーッタラの「目的実現」解釈

本節で、ダルモーッタラが「目的実現」をどのように解釈しているかを考察する。「目的実現能力」とは、「目的実現」に対する能力のことであり、「目的実現」の考察により、「目的実現能力」の意味も明らかになる。その考察により、ダルマキールティからダルモーッタラまでの、「目的実現」に対する理解の変遷を明らかにする。

2.1 複合語解釈

まず以下にダルモーッタラによる「目的実現能力」の複合語解釈を示す。

NB 1.15: arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ ||

vastu は目的実現能力を定義的特質とするからである。

NBṬ on NB 1.15: arthyata ity arthaḥ | heya upādeyaś ca | heyo hi hātum iṣyata upādeyaś ca upādātum | arthasya prayojanasya kriyā niṣpattiḥ | tasyām sāmarthyaṃ śaktiḥ |

artha という語は求められるものを意味する。放棄されるべきものと獲得されるべきものである。実に放棄されるべきものは放棄しようと望まれ、そして獲得されるべきものは獲得しようと望まれる。〔arthakriyāsāmarthya という語は〕目的 (artha=prayojana) の実現 (kriyā=niṣpatti) に対する能力 (sāmarthya=śakti)〔を意味する〕。

ダルモーッタラがここで、「目的実現」を対象獲得あるは対象放棄と解釈していることがわかる。このことは **2.3** によっても裏付けられる。後述する（**2.3**）ように、彼のこのような「目的実現」理解は、ダルマキールティの考えに従っている。したがって、ダルモーッタラは当作品で、「目的実現能力」を「対象獲得あるいは放棄」に対する能力と解釈している。注意すべきなのは、「目的実現」を「対象獲得あるいは放棄」とする彼の解釈は、知覚と推理のいずれにとっても同様であるということである。

2.2 「目的実現能力」の実質

上に arthakriyāsāmarthya という複合語を分析した。次にダルモーッタラが述べている「目的実現能力」の実質を検討する。当該箇所の異読については、拙稿（繆 2019a: 91–93）を参考せよ。ここでは詳述しない。

> NBṬ on NB 1.15: tad eva lakṣaṇaṃ rūpaṃ yasya vastunaḥ tad arthakriyāsāmarthyalakṣaṇam | tasya bhāvaḥ | tasmāt | vastuśabdaḥ paramārthasatparyāyaḥ | tad ayam arthaḥ—yasmād arthakriyāsamarthaṃ paramārthasad ucyate | saṃnidhānāsaṃnidhānābhyāṃ ca jñānapratibhāsasya bhedako ’rtho ’rthakriyāsamarthaḥ | tasmāt sa eva paramārthasan |
>
> まさにそうした定義的特質、すなわち本質を持つ vastu が、「目的実現能力を定義的特質とするもの」（arthakriyāsāmarthyalakṣaṇa）である。それの性質（bhāva）が［arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatva と言われている］。vastu という語は paramārthasat という語の同義語である。それゆえ、次のことが意図されている。目的実現能力のあるものは勝義有と呼ばれる。そして、近接と非近接によって認識の顕現に差異をもたらすような対象が、目的実現に対する能力のあるものである。それゆえ、その〔対象〕だけが勝義有である。

上記の彼の言明から、「目的実現能力」は「近接と非近接によって認識の顕現に差異をもたらす能力」を指していると彼が理解していることが分かる。彼のこの理解はダルマキールティが考える「独自相が持つ知覚を生ぜしめる能力」に対応している。『正理一滴論注』において、ダルモーッタラは「目的実現能力」を「認識を生じさせる能力」、すなわち「知覚知を生じさせる能力」と解釈し、「壺の水を保持する能力」などについては言及していない。「目的実現能力」を「認識を生じさせる能力」と解釈することは後代のマノーラタナンディン（Manorathanandin 1040–1100 CE）の注釈にも見出される[3]。これまでのダルモーッタラの論述から見て、彼は当作品で、「目的実現」を対象獲得あるいは対象放棄と解釈し、また、独自相が持つ「認識を生じさせる能力」を、「目的実現」に対する能力と解釈している。後述する（**2.4**）ように、「認識が生ぜしめられること」、言い換えれば「認識の生起」は、知覚の場合の「対象獲得」に当たる。一方、知覚の場合の「対象放棄」については、**2.4** を参照せよ。

2.3 第一章第一偈との繋がり

前述した通り、ダルモーッタラは、「目的実現能力」を「認識を生じさせる能力」と解釈している。ただし、彼の解釈について、さらなる検討を必要とする。なぜなら、彼は、「目的実現」に「対象獲得あるいは放棄」と「認識の生起」という二通りの解釈を与えているからである。まず、ダルモーッタラがここで、「獲得」と「放棄」ということを述べていることについて考察したい。そこで、筆者が注目するのは NB 1.1 と NB 1.15 に対するダルモーッタラの注釈の類似性である。以下に彼の言明を引用する。

> NB 1.1: samyagjñānapūrvikā sarvapuruṣārthasiddhir iti tad vyutpādyate ||
>
> 人間の目的のすべての成就は正しい認識を先行要素とする。したがって、それ（正しい認識）を〔弟子に〕理解させる[4]。

---

[3]PVV on PV3.3: arthakriyāyāṃ jñānādikāyāṃ svarūpopadhānena samartho yat tad atra vastuvicāre paramārthasat | （「認識などいった目的実現に対して、自分の姿を与える点で能力のあるもの、それは、この実在を考察する場合、勝義有である」）

[4]訳はダルモーッタラ釈に従う。

NBṬ on NB 1.1: puruṣasyārthaḥ puruṣārthaḥ | arthyate iti arthaḥ kāmyate iti yāvat | heyo ’rthaḥ upādeyo vā | heyo hy artho hātum iṣyate upādeyo ’pi upādātum...tasya siddhiḥ—hānam, upādānaṃ ca | hetunibandhanā hi siddhir utpattir ucyate | jñānanibandhanā tu siddhir anuṣṭhānam | heyasya ca hānam anuṣṭhānam upādeyasya copādānam | tato heyopādeyayor hānopādānalakṣaṇānuṣṭhitiḥ siddhir ity ucyate |

〔NB 1.1 における〕puruṣārtha は人間の目的〔を意味する〕。artha という語は要するに求められるもの〔という意味である〕。放棄されるべきものあるいは獲得されるべきもの〔を意味する〕。実に放棄されるべき対象は放棄しようと望まれ、また獲得されるべき対象は獲得しようと望まれる。（中略）それ（artha:目的）の成就（siddhi）は〔放棄されるべき対象を〕放棄することと〔獲得されるべき対象を〕獲得することである。実に原因を根拠とする成就（siddhi）は「発生」（utpatti）と呼ばれる。一方、認識を根拠とする成就は「遂行」（anuṣṭhāna）と呼ばれる。遂行とは放棄されるべき〔対象を〕放棄することと獲得されるべき〔対象を〕獲得することである。それゆえ、放棄されるべき〔対象を〕放棄すること及び獲得されるべき〔対象を〕獲得することを特徴とする遂行は〔NB 1.1 において〕「成就」（siddhi）と呼ばれる。

Nagatomi 1967–68 によれば、ダルマキールティが考える「目的実現」（arthakriyā）の第一義は「人間の目的の成就」（puruṣārthasiddhi）である[5]。ダルモーッタラが「目的実現」（arthakriyā）における artha を上の puruṣārthasiddhi の artha と同じく獲得されるべきものと放棄されるべきものと表現していた（**2.1**）ことに注意したい。また、arthasiddhi と arthakriyā の語意と複合語解釈の同一性から見ても、この二つのスートラに対するダルモーッタラの分析の関連性は明白である。それゆえ、上で述べたダルモーッタラが「目的実現」を「対象獲得あるいは放棄」と解釈していること（**2.1**）は証明される。この点について、Nagatomi 1967–1968 によれば、ダルマキールティは既に「目的実現」を「望まれるものの実現」及び「望まれないものの非実現」（iṣṭāniṣṭasādhanāsādhana）と解釈している[6]。したがって、ダルモーッタラのこのような arthakriyā 理解の下地はダルマキールティの論説の中に十分に準備されていたと考えられる。

次に、ダルモーッタラが考える「認識の生起」と「対象獲得あるいは放棄」の関係を探るため、以下に「認識の生起」と「対象獲得あるいは放棄」が同時に登場する議論を考察したい。

---

[5]“Thus, for Dharmakī, the primary meaning of *arthakriyā* was *puruṣārthasiddhi* (= *iṣṭāniṣṭasādhanāsādhana*), and the term meant ‘causal power’ only secondarily.” (Nagatomi 1967–68: 59)

[6]“In the light of these comments of Dharmakīrti, the *arthakriyā* of which the existent is capable must be understood as an action that fulfils a human purpose, namely the attaining of the desirable and the shunning of the undesirable. . .” (Nagatomi 1967–68: 58)
Nagatomi 1967–68 の説明と関連する文脈を以下に示す。

PV 1.93: yasmāt api pravarteta pumān vijñāyārthakriyākṣamān | tatsādhanāyety artheṣu saṃyojyante ’bhidhāyakāḥ || PVSV on PV 1.93: na khalu vai vyasanam evaital lokasya yad ayam asaṃketayann aprayuñjāno vā śabdān duḥkham āsīta | kiṃ tarhi | sarva evāsyāvadheya ārambhaḥ phalārthaḥ | niṣphalārambhasyopekṣaṇīyatvāt | tad ayaṃ śabdān api kvacin niyuñjānaḥ phalam eva kiṃcid īhituṃ yuktaḥ | tac ca sarvaṃ tyāgāptilakṣaṇam iṣṭāniṣṭayoḥ | tenāyam iṣṭāniṣṭayoḥ sādhanam asādhanaṃ ca jñātvā tatra pravṛttinivṛttī kuryāṃ kārayeyaṃ veti śabdān niyuñjīta niyoge vādriyeta | anyathopekṣaṇīyatvāt |（「また、人は、〔対象を〕認識してから、〔その〕目的実現を可能にする諸々の対象に対して、活動を起こすであろう。その〔活動〕の実現のために、という理由から、諸々の対象に対して、諸々の〔言語〕表現が適用される。言語協約せずに、あるいは諸々の言葉を使わずに、苦に陥ったとしても、このことは、世間の人々にとって、必ずしも有害なものではない。その場合、どのようになるのか。この人が、こころを向けるべきすべての活動の開始は、何らの結果を目的としている。なぜなら、結果〔をもたらさ〕ない活動開始は無視されるべきからである。それゆえ、この人が、諸々の言葉を何らのものに適用するときにも、他ならぬ何らの結果を念頭に置くことは合理的である。そして、すべてのもの（結果）というのは、望まれるものを獲得すること及び望まれないものを放棄することを特徴としている。それゆえ、この人は、望まれるものの実現あるいは望まれないものの非実在を認識して、それに対して、〔人は〕活動を開始するあるいは活動を放棄する。「私は〔獲得あるいは放棄〕すべき」あるいは「私は〔獲得あるいは放棄〕させるべき」という諸々のことばを適用するか、〔他人からの〕「任用」（niyoga）に対して、注意を払うであろう。そうでなければ、関心が寄せられ得ないからである」）

2.4 対象獲得と対象放棄と認識の生起

本節で、「対象獲得」「対象放棄」「認識の生起」に対するダルモーッタラの理解を考察したい。

NBṬ on NB 1.1: samyagjñānaṃ pūrvaṃ kāraṇaṃ yasyāḥ sā tathoktā | kāryāt pūrvaṃ bhavat kāraṇaṃ pūrvam uktaṃ | kāraṇaśabdopādāne tu puruṣārthasiddheḥ sākṣātkāraṇaṃ gamyeta | pūrvaśabde tu pūrvamātram | dvividhaṃ ca samyagjñānaṃ arthakriyānirbhāsam arthakriyāsamarthe ca pravartakam | tayor madhye yat pravartakaṃ tad iha parīkṣyate | tac ca pūrvamātram | na tu sākṣātkāraṇam |

先行要素（pūrva）は原因（kāraṇa）を意味し、正しい認識を先行要素（原因）とするもの（人間の目的のすべての成就）がそのよう言われている。結果より先に存在するから、原因は「先行要素」といわれる。しかし、「原因」という語が述べられるとき、〔正しい認識は〕人間の目的の遂行の直接原因（sākṣātkāraṇa）と理解されるであろう。一方、「先行要素」という語が〔述べられるとき、正しい認識は人間の目的の遂行の〕単なる先行要素〔と理解されるであろう〕。そして、正しい知には二種ある。「目的実現である顕現を有するもの」（知覚）と「目的実現に対する能力のある〔対象〕に対して、〔人を〕行動させるもの」（推理知）である。その二者のうち、〔目的実現に対する能力のある〔対象に対して人を〕行動させるもの、それがこの〔文脈〕で考察される。そして、それ（行動させる認識）は単なる先行要素であり、直接原因ではない。

当該箇所で、「目的実現」が登場することもまた、NB 1.1 と NB 1.15 という二箇所についてダルモーッタラが為した注釈の強い関係性を示している。彼は正しい認識（samjagjñāna=pramāṇa）を二種類に分けて、「目的実現である顕現を有するもの」（知覚）と「目的実現能力のあるもの（独自相）に対して人を行動させるもの」（推理知）と言っている。正しい認識のうち、知覚（独自相がその対象）は人間の目的の成就の直接原因となるが、推理知（共通相がその対象）は人間の目的の成就の直接原因とはならない、単なる「先行要素」（間接原因）であると彼は言う。

「推理知が人間の目的実現の単なる先行要素である」ということの理由を、ダルモーッタラは以下のように述べている。

NBṬ on NB 1.1: samyagjñāne hi sati pūrvadr̥ṣṭasmaraṇam | smaraṇād abhilāṣaḥ | abhilāṣāt pravr̥ttiḥ pravr̥tteś ca prāptiḥ | tato na sākṣāddhetuḥ |

実に〔この種の〕正しい認識が起こるとき、以前に知覚されたものの想起〔が起こる〕。想起を通じて、欲求〔が起こる〕。欲求を通じて、行動〔が起こる〕。そして行動を通じて、〔対象の〕獲得〔が起こる〕。それゆえ、〔推理知は〕直接原因ではない。

彼は推理知から対象獲得までの過程を示している。

推理 → 想起 → 欲求 → 行動 → 対象獲得

「対象放棄」について、ダルモーッタラは具体的な説明を与えていないが、「獲得」の場合の過程に基づいて、次のように考えられる。まず推理知が起こる。推理知が起こるとき、以前に知覚されたものの想起が起こる。想起を通じて、対象を放棄しようという欲求が起こる。欲求を通じて、対象を離れるなどの行為が起こる。そして、行為を通じて、対象の放棄が起こる。

推理知 → 想起 → 欲求（放棄しよう）→ 行動（対象を離れるなど）→ 対象放棄

推理の場合、人間は対象獲得あるいは対象放棄を望むものの、共通相を対象とする推理知はあくまでも「対象獲得」と「対象放棄」の間接原因であり、直接原因ではない。

知覚の場合、人間が望む「目的実現」を、ダルモーッタラは以下のように説明している。

> NBṬ on NB 1.1: arthakriyānirbhāsaṃ tu yady api sākṣātprāptiḥ tathāpi tan na parīkṣaṇīyam | yatraiva hi prekṣāvanto ’rthinaḥ sāśaṅkāḥ tat parīkṣyate | arthakriyānirbhāse ca jñāne sati siddhaḥ puruṣārthaḥ | tena tatra na sāśaṅkā arthinaḥ | atas tan na parīkṣaṇīyam | tasmāt parīkṣārham asākṣātkāraṇaṃ samyagjñānam ādarśayituṃ kāraṇaśabdaṃ parityajya pūrvagrahaṇaṃ kṛtam |
>
> たとえ、目的実現である顕現〔を有する認識〕は直接に〔対象を〕獲得すること〔そのもの〕であるとしても、それ（目的実現である顕現を有する認識）を考察する必要はない。なぜなら、ある〔認識〕X に対して、対象を求める思慮深い者たちが疑念を抱く場合、その X が考察される。しかし（ca）、目的実現である顕現を有する認識が生じるとき、人間の目的は成就する。それゆえ、その〔認識〕に対して、対象を求める者たちは懸念を抱かない。これゆえ、それ（目的実現である顕現を有する認識）は考察する必要がない。それゆえ、考察に値する、直接原因ではない正しい認識を示すために、「原因」という語を放棄して「先行要素」の言明がなされる。

ダルモーッタラが考える「目的実現」が対象獲得あるいは対象放棄であることは既に説明した。上に引くダルモーッタラの叙述によれば、知覚の場合、人々が望む「目的実現」は認識の生起である。ダルモーッタラは、それを「直接的な〔対象の〕獲得」（sākṣātprāpti）と言い換えている（arthakriyānirbhāsam sākṣātprāptiḥ）。彼は推理知の場合の対象獲得を解釈してから、上のこの一文を述べている。それゆえ、ここで彼が言う「獲得」（prāpti）は「対象獲得」と繋がるものである。知覚と推理のいずれの場合においても、「目的実現」は「対象獲得あるいは放棄」であることを前提にして、彼は、知覚の場合の対象獲得を認識の生起と理解している。

知覚の場合の「対象放棄」については、次のように考えられる。「対象獲得」が「知覚知の生起」であるならば、「対象放棄」は「知覚非生起」に相当する。知覚知が生起しないことは、認識が起こらないことである。

結論

ダルマキールティは「目的実現」を「望まれるものの実現及び望まれないものの非実現」とした。また、「目的実現」の一種として、「知覚を生じさせること」を彼は挙げている。彼は、知覚と推理による「目的実現」をいずれも、「望まれるものの実現及び望まれないものの非実現」としている。それを、ダルモーッタラは「獲得されるべき対象の獲得及び放棄されるべき対象の放棄」と言い換える。彼の「目的実現」理解の特徴は、彼が知覚の場合の「対象獲得」を「認識の生起」、すなわち「知覚知の生起」と解釈することである。彼は、ダルマキールティが言う「望まれるものの実現」は「認識を生じさせること」に相当すると考えて、彼独自の「目的実現」理解を導いた。すなわち、推理の場合、人間は対象を獲得あるいは放棄することを望む。一方、知覚の場合、人は「認識の生起」（対象獲得）だけを望む。

略号及び参考文献

DhP: Durveka Miśra’s *Dharmottarapradīpa*. See Malvania 1971.

NB: Dharmakīrti’s *Nyāyabindu*. See Malvania 1971.

NBṬ: Dharmottara’s *Nyāyabinduṭīkā*. See Malvania 1971.

PV: Dharmakīrti's *Pramānavārttika*. See Pandeya 1989.

PVSV: Dharmakīrti's *Pramānavārttikasvavṛtti*. See Pandeya 1989.

PVV: Manorathanandin's *Pramānavārttikavṛtti*. See Pandeya 1989.

Hatano, Kisho（秦野 貴生）
2017 「ダルマキールティの用いる共相の考察」『印度学仏教学研究』66-1, 60–63.

Inami, Masahiro（稲見 正浩）
2012 「存在論―存在と因果」『シリーズ大乗仏教 9 認識論と論理学』所収（pp. 49–90）東京：春秋社.

Katsura, Shoryu（桂 紹隆）
1983 「ダルマキールティの因果論」『南部仏教』50, 96–114.

Malvania, Dalsukhbhai (ed.)
1971 *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa [Being a Sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a Commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu*]. Tibetan Sankskrit Works Series, vol. 11, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1955. 2nd ed., 1971.

Miao, Shoule（繆 寿楽）
2019a 「vastu に対する一考察—『正理一滴論』ダルモーッタラ注の解釈—」『哲学』71, 87–101.
2019b 「『ニヤーヤ・ビンドウ』第一章第一偈の研究—ダルモーッタラ釈とヴィニータデーヴァ釈—」『比較論理学研究』16, 143–173.

Mikogami, Esho（神子上 恵生）
1979 "Some Remarks on the Concept of Arthakriyā." *Journal of Indian Philosophy* 7, 79–94.

Nagatomi, Masatoshi（永富 正俊）
1967–68 "Arthakriyā." *Adyar Library Bulletin* 31–32, 52–72.

Oki, Kazufumi（沖 和史）
1982 「自相について」『密教学研究』14, 99–114.
1983 「ダルモーッタラの「量量果非別体論」」『原始仏教と大乗仏教：渡辺文麿博士追悼記念論集 下』所収（pp. 119–136）京都：永田文昌堂.

Pandeya, Ram Chandra (ed.)
1989 *The Pramāṇavārttikam of Ācārya Dharmakīrti: With the Commentaries Svopajñavṛtti of the Author and Pramāṇavārttikavṛtti of Manorathanandin*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Dharmottara on *arthakriyā*

MIAO Shoule

Arthakriyā, the key concept of Dharmakīrti's epistemology, has been the object of many investigations. Dharmakīrti used *arthakriyā* to distinguish *svalakṣaṇa* from *sāmānyalakṣaṇa*. The *Pramāṇavārttika* states that *svalakṣaṇa* is capable of bringing about *arthakriyā*, whereas *sāmānyalakṣaṇa* is not (PV 3.3: *arthakriyāsamarthaṃ yat tad atra paramārthasat* | *anyat saṃvr̥tisat proktaṃ te svasāmānyalakṣaṇe* ||). Post-Dharmakīrti commentators have developed colorful arguments for this concept, and these arguments have been a major locus of research in Buddhist *pramāṇa* theory. Nevertheless, the arguments made by Dharmottara, a famous commentator on Dharmakīrti's works, have not been fully investigated. The purpose of this paper is to clarify Dharmottara's arguments, to further the understanding of this notable concept, *arthakiryā*. A close examination of Dharmottara's statements in his *Nyāyabinduṭīkā* clarifies his view of *arthakriyā*:

1. Dharmottara deems *arthakriyā* to be the obtaining of desirable objects or the shunning of undesirable objects (*heyasya hānam upādeyasya upādānam*) in the cases of both inference (*anumāna*) and perception (*pratyakṣa*).
2. Through inference, one wishes to obtain or shun an external object. To delineate that inference is not the direct cause of "the obtaining of an object," Dharmottara shows how inference leads us to obtain the object. When inference occurs, we remember what we have observed before; this remembrance stimulates a will to take action, and this action leads us to obtain the object (NBṬ on NB 1.1: *samyagjñāne hi sati pūrvadr̥ṣṭasmaraṇam* | *smaraṇād abhilāṣaḥ* | *abhilāṣāt pravr̥ttiḥ pravr̥tteś ca prāptiḥ* | *tato na sākṣāddhetuḥ* |). Although Dharmottara does not explain how inference leads us to shun an object, the explanation is the same as aforementioned, i.e., when inference occurs, we remember what we have observed before; this remembrance stimulates a will to take action, and this action leads us to shun the object.
3. Through perception, one wishes only to obtain an object. In this case, the arising of a cognition is "the obtaining of an object," because one's object is achieved when a cognition arises (NBṬ on NB 1.1: *arthakriyānirbhāse ca jñāne sati siddhaḥ puruṣārthaḥ* |). Therefore, perception is the direct cause of "the obtaining of an object." As for the shunning of an object, Dharmottara makes no statements, but his perspective can be understood as follows: since the arising of a cognition means "the obtaining of an object," "the shunning of an object" should be the non-arising of a cognition.

The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic 17 (2020): 91–98.
email: msl199595@gmail.com